



# 徳久利遺跡 (第6次発掘調査)

富士見町道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書

富士見町

1994.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が徳久利遺跡

# 序

本書は、富士見町道改良工事に伴って原村教育委員会が今年度実施した発掘調査報告書です。

中央自動車道が開通したあと諸開発が進み、交通量は日増しに多くなってきています。こうした流れの中で、このたびは道改良工事に伴う発掘調査を行いました。いかなる形で遺跡を保護していくか、最も妥当な方法を検討しているところであります。

発掘調査は、限られた狭い範囲でありましたが、縄文時代人の残した竪穴住居址2軒、小竪穴25基、多数の土器と石器を発見することができました。このような貴重な文化遺産を目のあたりにすると、感動を覚えるとともに後世に伝えていく責任を強く感じるものであります。

発掘調査にあたり、富士見町役場建設課各位のご理解・ご協力、長野県教育委員会のご指導をはじめ発掘調査にかかわる多くの皆様のご協力で深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では、炎天下でご苦勞された作業員の皆様により、失われていく貴重な文化財を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

# 例 言

- 1 本書は、富士見町道改良工事に伴って実施した長野県諏訪郡原村南原に所在する徳久利遺跡第6次緊急発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、富士見町から委託を受けた原村教育委員会が、平成5年8月2日から9月10日まで実施した。整理作業は平成5年9月16日から平成6年3月25日まで行った。
- 3 現場における遺構実測・記録は五味一郎・井上智恵子、写真撮影は五味が行った。
- 4 遺構実測図・写真・遺物整理等は五味と井上、原稿の執筆は平出一治が行った。
- 5 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。  
なお、本調査関係の資料には、72の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にいたる過程で、長野県教育委員会文化課指導主事 小平和夫・小池幸夫・春日雅博の各氏にご指導ご教示を賜わった。記して厚く感謝申し上げる次第である。

# 目 次

## 例言・目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	調査組織	1
III	発掘調査の経過	2
IV	遺跡の位置と歴史的環境	2
V	調査方法と層序	4
VI	遺構と遺物	4
VII	まとめ	13

# I 発掘調査に至る経過

富士見町は道路改良工事を計画したが、たまたま予定地に徳久利遺跡（原村遺跡番号72）が存在していた。この辺りは富士見町地籍と原村地籍が複雑に入り込み、道路の維持管理は区間を決め富士見町と原村で行っている。対象地の維持管理は富士見町であり、遺跡は原村地籍になる。保護については、長野県教育委員会の指導をいただき富士見町建設課と協議を行った。

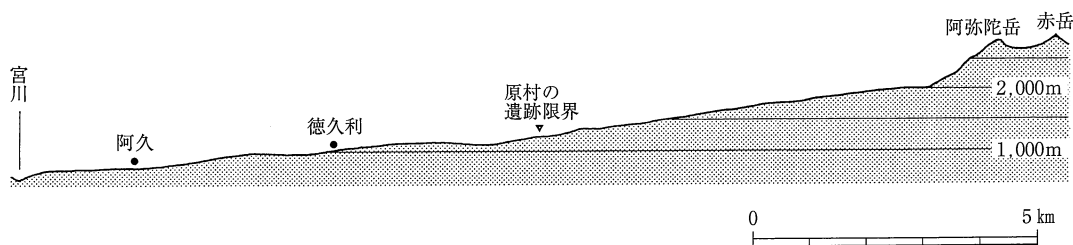
本来なら遺跡は現状のまま保存することが最も望ましいことであるが、交通量は年々増しており、平成5年度に緊急発掘調査を実施し記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

その後も調査日程等の打ち合わせを行い、原村教育委員会は富士見町から記録保存に係る委託を受け、平成5年8月2日から9月10日に緊急発掘調査を実施した。

# II 調査組織

## 発掘調査団名簿

団長	平林 太尾（原村教育委員会教育長）
調査担当者	五味 一郎（原村教育委員会）
調査員	井上智恵子
調査参加者	小池 静子 小池 英幸 清水 けさ 清水つるゑ 清水 正進
事務局	平林今朝二（教育次長） 大口美代子（庶務係長） 宮坂 道彦 伊藤 佳江 五味 一郎 平出 一治 平林とし美



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—徳久利—赤岳ライン）

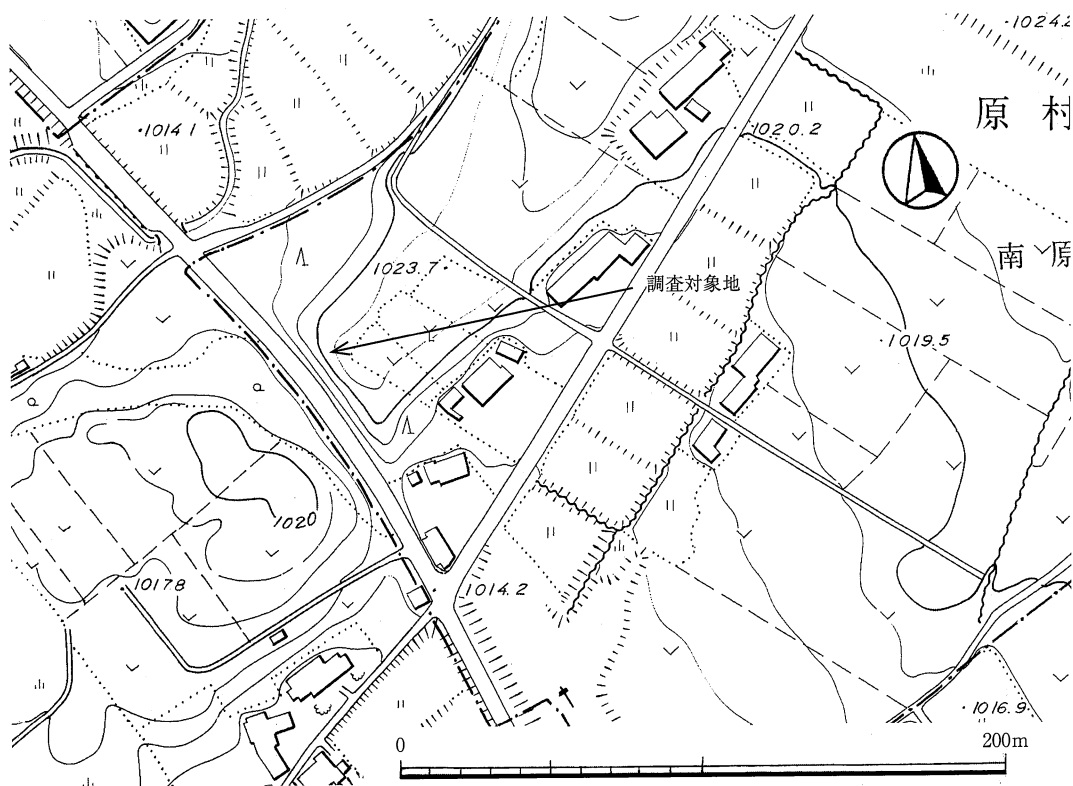
### Ⅲ 発掘調査の経過

#### 調査日誌

- 平成5年8月2日 発掘準備、重機で表土剥ぎをはじめめる。
- 4日 基準杭の打設、グリッド設定を行う。
- 5日 人力で遺構検出作業をはじめめる。
- 19日 小竪穴20～25・36・37とロームマウンドNo.2の検出写真、礫出土写真の撮影を行う。順次精査をはじめめる。
- 20日 小竪穴23・28・29・31・32・38の埋土の観察と写真撮影、小竪穴21・36の全景写真撮影を行う。
- 23日 小竪穴24・25・35の埋土の観察と写真撮影、小竪穴20・23・25・26・28・29・31の全景写真撮影を行う。小竪穴の実測をはじめめる。
- 24日 小竪穴34・37とロームマウンドNo.2の埋土の観察と写真撮影、小竪穴22・24・35・38の全景写真撮影を行う。
- 25日 小竪穴32～34・37・39の全景写真撮影を行う。
- 26日 小竪穴41土器出土写真、小竪穴41・42の全景写真、小竪穴群の写真撮影を行う。
- 31日 第25号竪穴住居址の検出写真、小竪穴37の全景写真撮影を行う。
- 9月1日 第19号竪穴住居址の検出写真、第25号竪穴住居址礫出土状態の写真撮影を行う。
- 2日 第19号竪穴住居址、小竪穴44の全景写真撮影を行う。
- 6日 第25号竪穴住居址、小竪穴27の全景写真撮影、機材の撤去など片付けを行う。
- 10日 実測作業を行い発掘は終了する。

### Ⅳ 遺跡の位置と歴史的環境

徳久利遺跡（原村遺跡番号72）は八ヶ岳西麓に位置し、長野県諏訪郡原村の南原区と富士見町の富原区に展開している。この辺りは当地方に特有な東西に細長く伸びる大小様々の尾根が幾筋もみられる。それらの尾根上から緩やかな南斜面には、縄文時代を中心とす



第2図 地形図 (1 : 2,500)

る数多い遺跡が点在している。

その一つである本遺跡は、八ヶ岳から流下する富士見二の沢川と富士見一の沢川に挟まれた尾根上から斜面に立地する。原村地籍の尾根幅は富士見町地籍より狭くなり、南斜面は宅地化が進み削平されている。調査地点付近の標高は1,010m前後を測り、地目は宅地と普通畑であるが地味は良い。

本遺跡は原村と富士見町では遺跡名が以前は違っていた。

原村は『諏訪史 第一巻』と『信濃史料 第一巻上』にコケ尾根遺跡とみえる。長野県教育委員会が昭和42年度に実施した「中央道建設地域内埋蔵文化財緊急分布調査」では南原遺跡と呼称し、報告書に「東西に走る帯状台地を南北に切開いた開拓道路の北側に竪穴住居址のカッティングが露出している。こうした遺構は2カ所あり、うち1カ所は、炉址が認められ、その径は3.5mである。」との記載がある。

富士見町は徳久利遺跡と呼称し昭和24・25・26年の3次にわたる発掘調査で、縄文時代中期から後期の竪穴住居址13軒と小竪穴2基を検出している。後期の5軒は部分敷石住居址である。出土した土器と石器は数多く、美術全集に写真がたびたび掲載されている当地方を代表するような優品もある。

長野県教育委員会が昭和54年度に実施した「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」で、原村の

遺跡名を徳久利遺跡に改め今日に至っている。

その後、昭和59年度に原村教育委員会は土取りと造成に伴う第4次緊急発掘調査で、縄文時代中期から後期の竪穴住居址5軒、配石1、小竪穴19基を検出した。富士見町教育委員会は宅地造成に伴う第5次緊急発掘調査で、縄文時代中期の竪穴住居址1軒を検出している。

## V 調査方法と層序

発掘調査の対象は、道路拡張工事に係る細長い限られた範囲である。東側の隣接地は昭和59年度に土取りと造成工事に伴い第4次緊急発掘調査を実施した地点であり、西側の隣接地は本改良事業が行われる既存道路で、本調査地点だけが取り残されていた。したがって広い箇所でも巾7m程であるが2×2mのグリッドを設定した。

表土は重機で剥ぎ、遺構の検出は人力で行った。原則として層位別にローム層上面まで掘り下げた。調査面積は180㎡である。

竪穴住居址の調査は遺存した範囲が少なく、認定が遅れたこともあり土層観察ベルトを設定することはできなかった。小竪穴の調査は検出した平面で二分割し、半分の掘り下げを行い埋土の観察をした後に残り半分を掘り下げた。

出土した遺物の取り上げは、基本的にグリッド別・層位別に行った。遺構に伴うものは遺構別に取り上げた。

測量は、予め打設した基準杭を基準にしたやり方方式による。

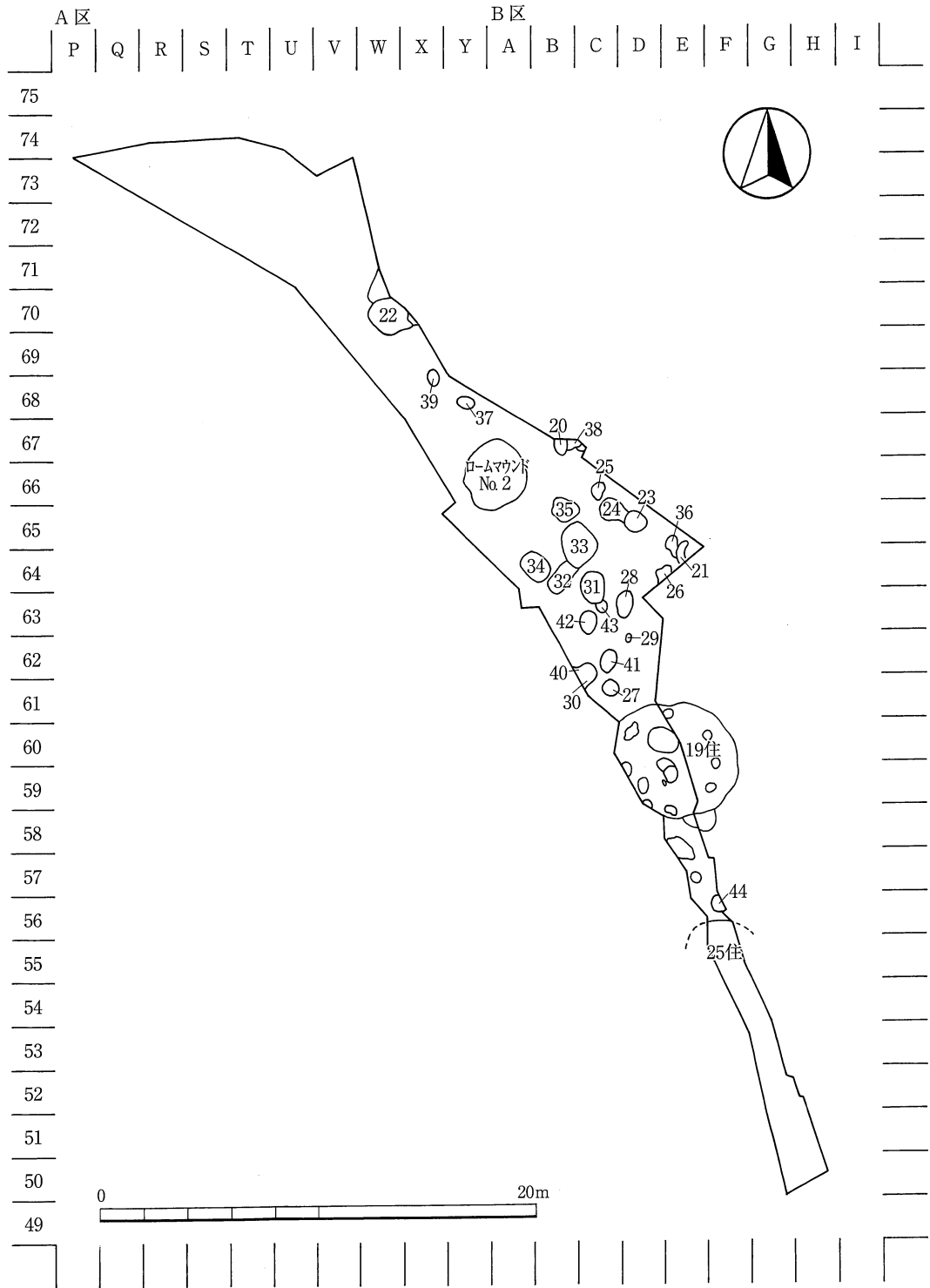
本遺跡における層序は、尾根上と斜面で違いはみられたが、基本的には上層から第Ⅰ層の黒褐色土（表土）、第Ⅱ層の茶褐色土、第Ⅲ層のソフトロームである。

## VI 遺構と遺物

検出した竪穴住居址は第19・25号の2軒、小竪穴は20～44の25基、ロームマウンドNo.2の1基である。遺構から出土した土器と石器は少ないが、遺構外からの出土は多い。

検出した竪穴住居址は「Ⅲ 遺跡の位置と歴史的環境」で述べた、中央道建設地域内埋蔵文化財緊急分布調査の折りに確認した2軒と思われる。その後カッティング面は崩れたためか炉址は確認できなかった。





第3図 遺構配置図

# 1 縄文時代の竪穴住居址

## 第19号竪穴住居址（第3・4・7図、写1）

南斜面で検出したが、炉址西側の僅かな範囲だけである。炉址を含めた東側は昭和59年度に実施した第4次調査で調査しているが、炉址は本調査の対象範囲内で再調査を行った。たまたま第4次調査の実測作業に用いた釘が残っていたため、第19号竪穴住居址の認定と平面実測には役立った。第4図に示した実測図は第4次調査と第6次調査のものを合わせてある。

小竪穴17との重複は、第4次調査で本址が古いことを確認している。

埋土は本調査と第4次調査の観察で、逆三角堆土と三角堆土の発達が認められた自然埋没と考えられるものである。

竪穴住居址は、535×(503)cmの不整円形でローム中に構築されていた。壁の状態は普通で、壁高は北が40cm、南は24cm、東は36cmを計る。周溝は壁直下にみられる。床面はほぼ平らである。ピットは10基検出したが、支柱穴は5基であろう。北壁際の柱穴は重複している。東壁際のピットは一部袋状になり柱穴とは違うようである。炉址は中央北寄りに構築されていた。すでに炉石は抜き取られているが方形切炬燵状石囲炉である。炉内から付近に散乱する石は炉石とは違うようである。

出土した遺物は土器と石器がある。本来なら第4次調査資料を含め報告すべきであるが、整理期間の関係で本調査資料のみの報告である。

土器は破片ばかり245点で11点（第7図1～11）を図示した。石器は図示しなかったが石鏃1点、打製石斧1点、凹石3点、黒曜石剥片49点、剥片8点である。

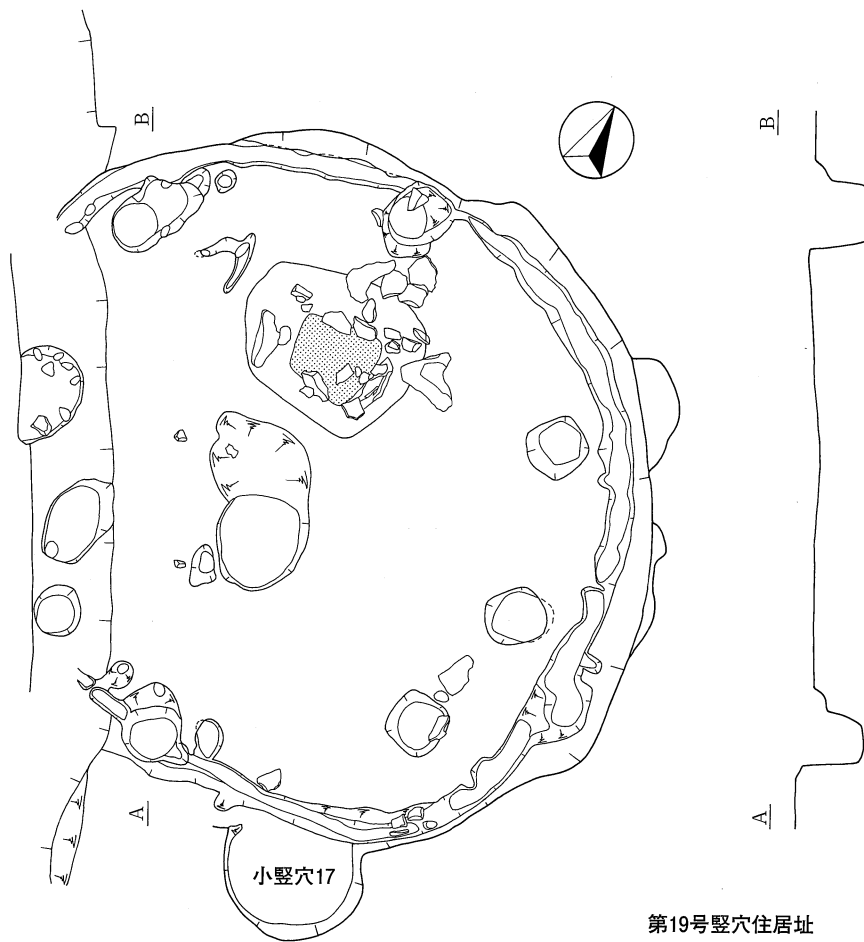
## 第25号竪穴住居址（第3・4・7図）

南斜面で検出したが、遺存した範囲は極めて少ない。第4次調査で本址と思われる竪穴住居址を認定し、精査後に欠番とした経過もあり詳しいことは不明である。

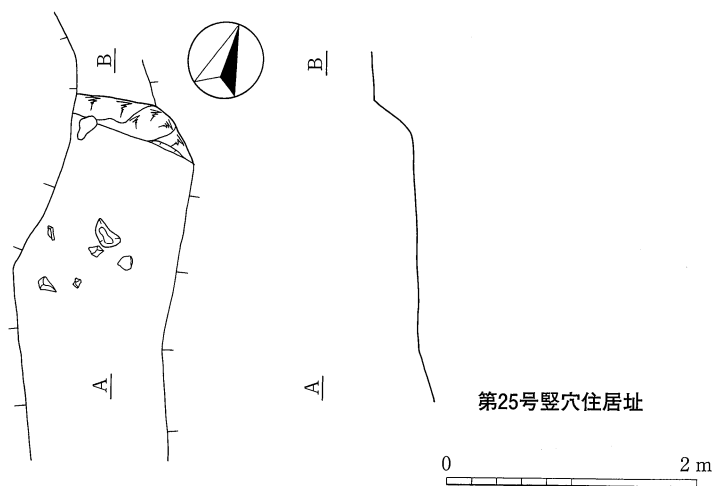
竪穴住居址は、(200)×(125)cmの範囲が遺存したが、ロームから茶褐色土（第Ⅱ層）中に構築されていたがすでに南側は流失していた。平面形は東側を第4次調査で、西側は道路建設で欠損しており不明である。壁はだらだらと立ち上がり良くないが高さは31cmを計る。床面はほぼ平らで、性格不明の小ピットがある。周溝・柱穴・炉址は検出できなかった。小礫は床面よりも浮いていた。

出土した遺物は土器と石器がある。

土器は破片ばかり34点と少ないが3点（第7図12～14）を図示した。石器は図示しなかったが黒曜石剥片3点、剥片1点である。

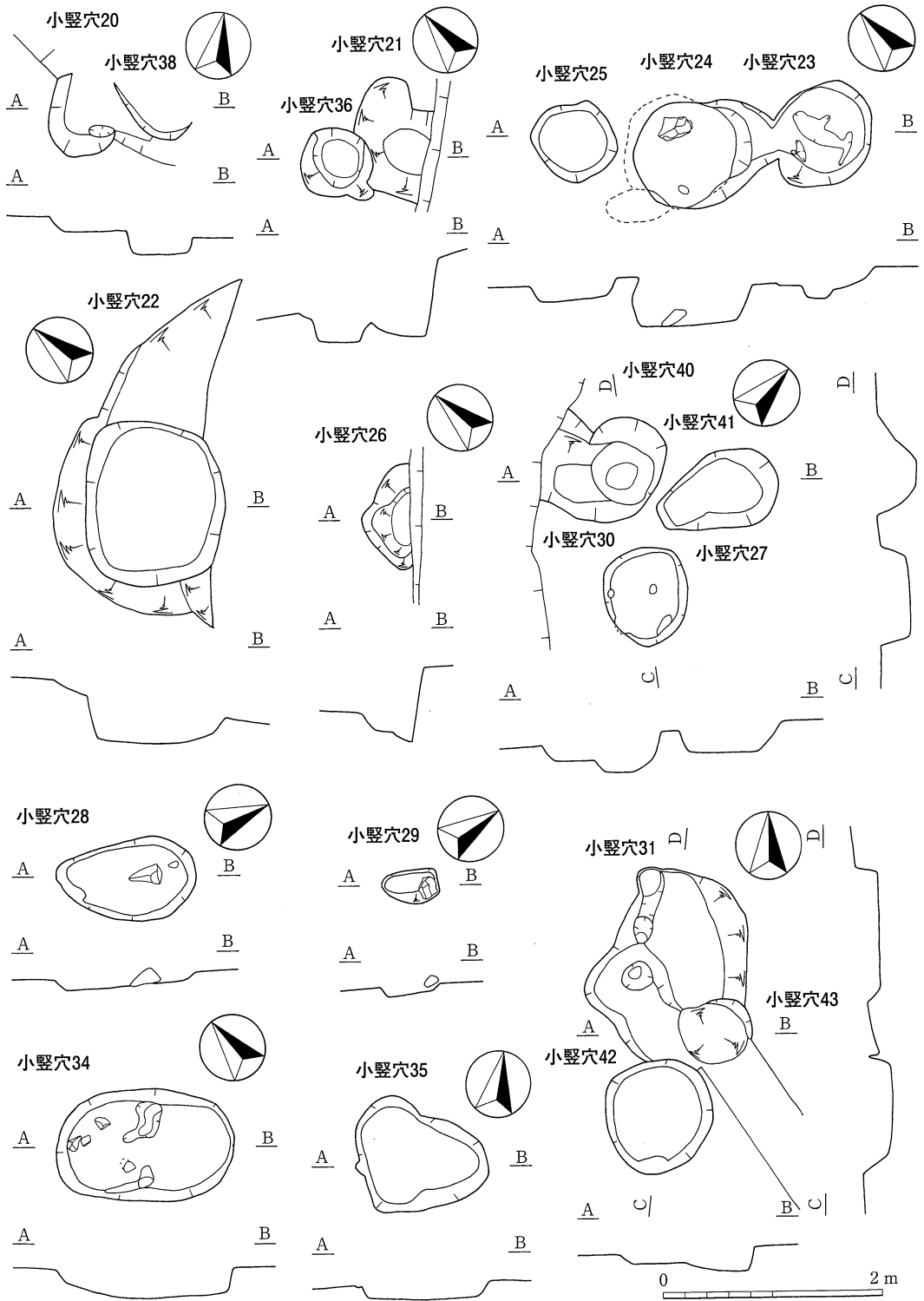


第19号竖穴住居址

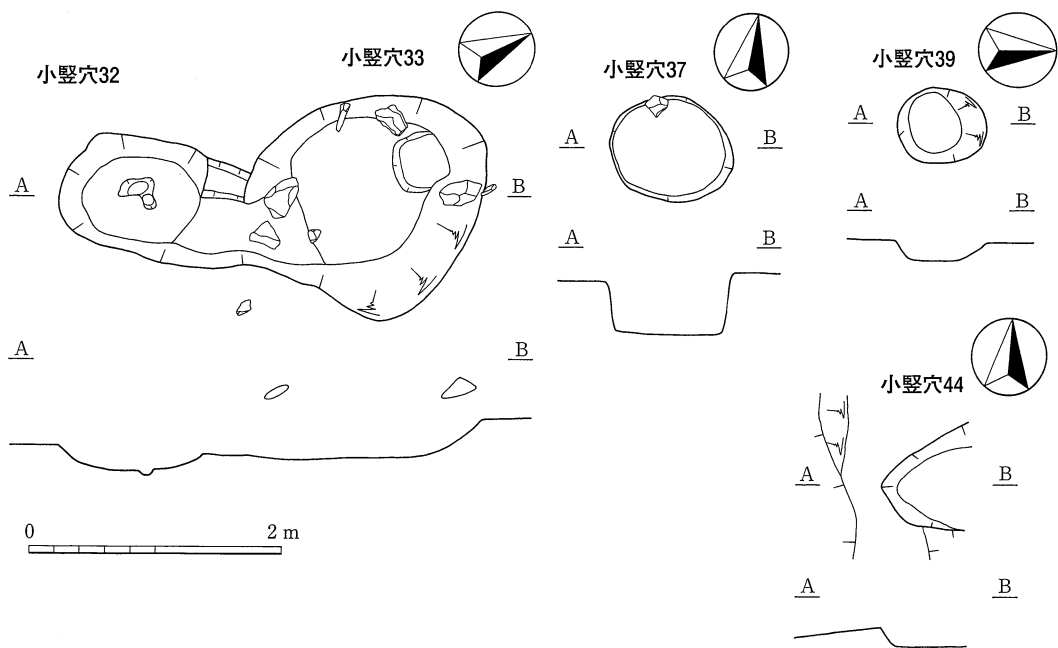


第25号竖穴住居址

第4图 第19·25号竖穴住居址实测图 (1:60)



第5图 小竖穴20~31·34~36·38·40~43实测图 (1:60)



第6図 小竪穴32・33・37・39・44実測図（1：60）

## 2 縄文時代の小竪穴

### 小竪穴20～44（第3・5～8図、写2・3、表1）

検出調査した小竪穴は25基で尾根上に集中しているが、小竪穴44は南斜面にある。ページ数の関係で平面形、規模、出土遺物等は一覧表にまとめてある。

平面形は円形と楕円形のものが多く、規模はまちまちで長軸方向も一様ではない。礫が伴うものもあるが性格は不明である。

土器と石器が出土した。

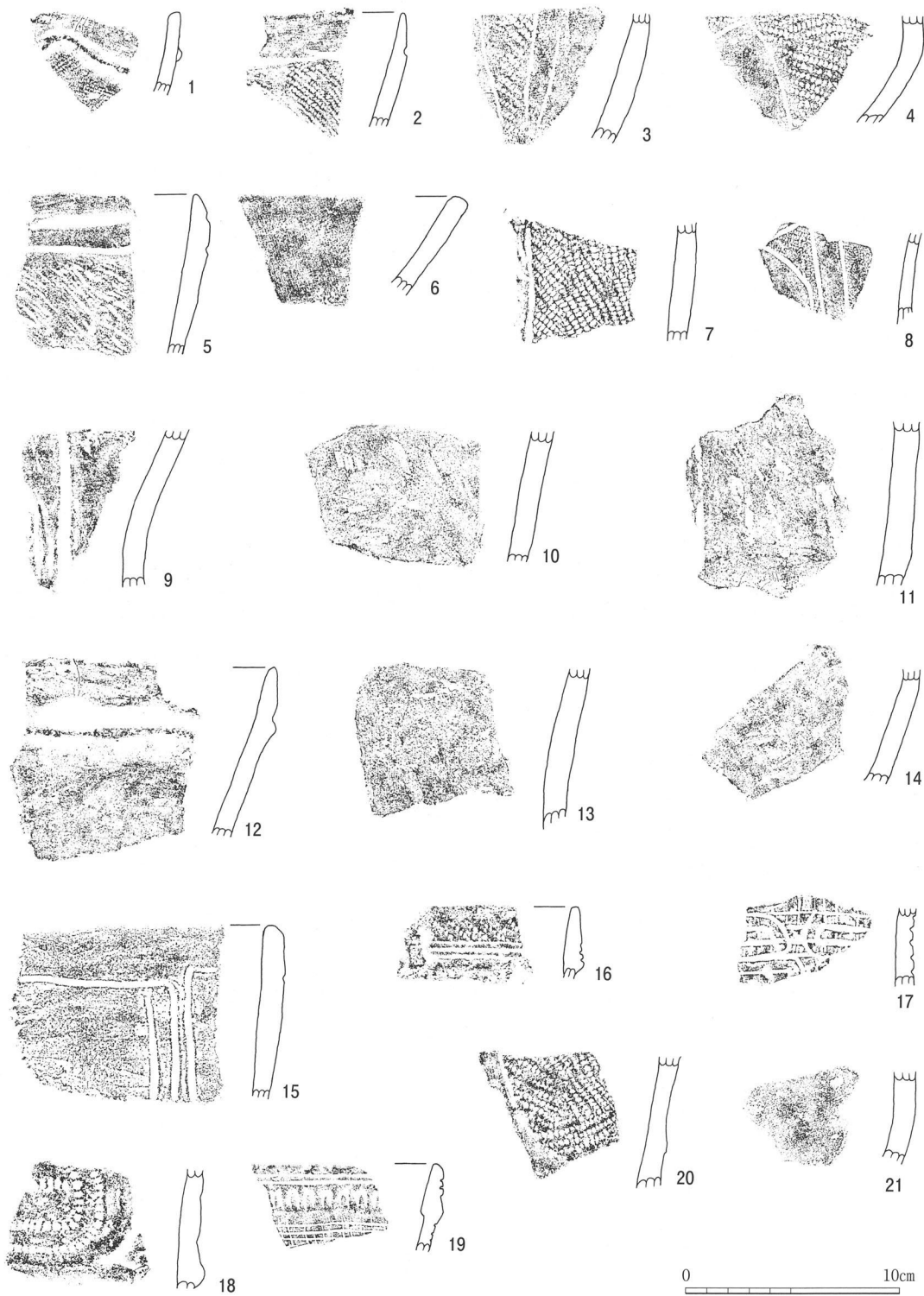
土器は破片ばかりであるが20基から出土した（第7図15～21、第8図22～51）。破片数は小竪穴20で45点を数えたが10点に満たないものが多い。小破片のうえに磨滅したものもあり流入と思われるが、小竪穴41は埋設された可能性の高い破片（写真3）もみられたが、小竪穴の帰属時期については不明といわざるをえない。

石器は図示しなかったが、小竪穴34から打製石斧1点、小竪穴27と小竪穴36から横刃形石器が各1点、黒曜石の剥片は13基から出土したが埋設したと思われる状態ではなかった。

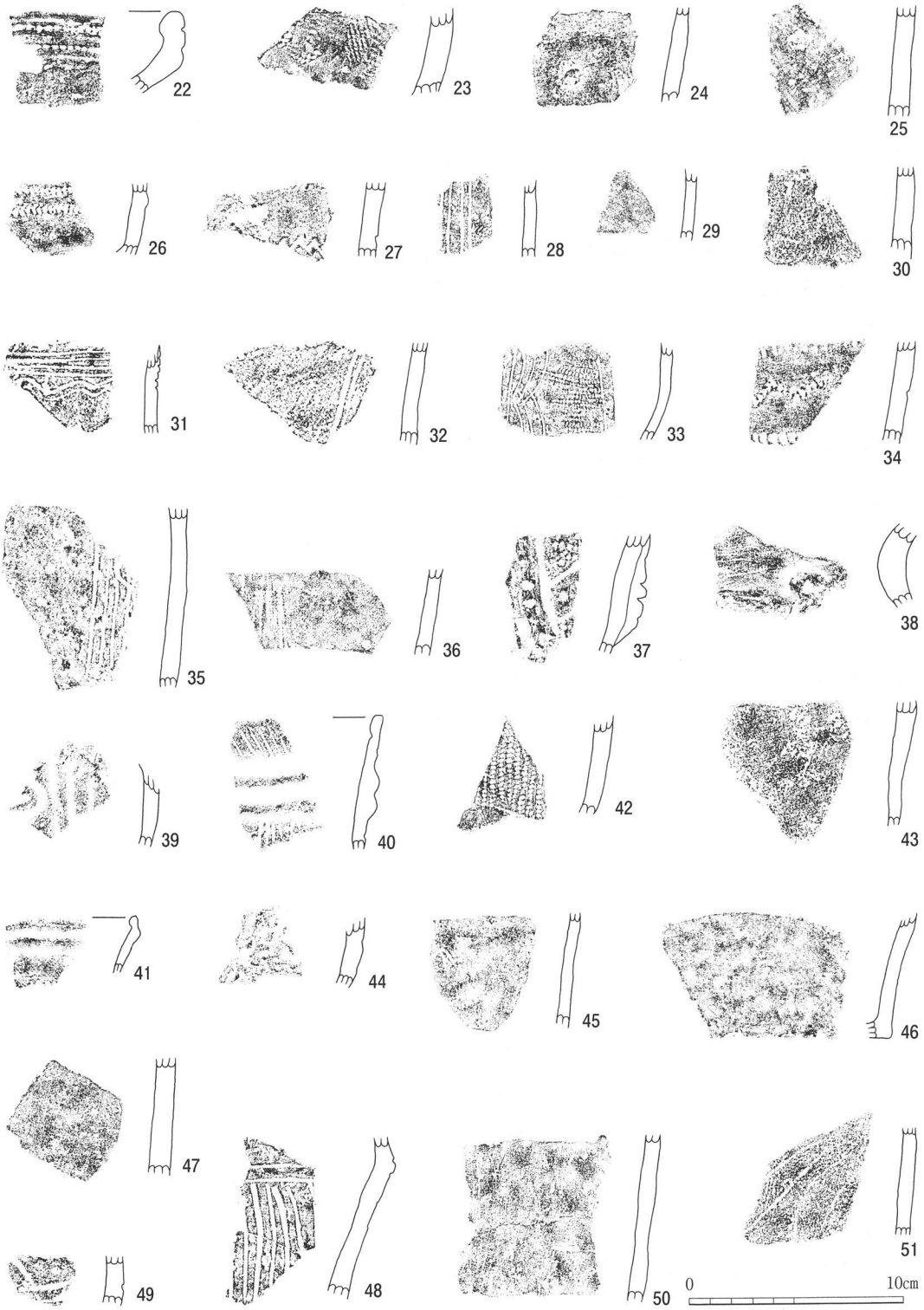
表1 小竪穴一覧表

規模欄のカッコ付け数値は現在値を示す

番号	図版	平面形	規 模 cm			遺構の特徴・出土遺物等
			長軸	短軸	深さ	
20	第5図	楕円形?	(66)	(45)	11	北側を欠損、小竪穴38と重複、土器破片45(第7図15~18)、遺構外に同個体破片有り、黒曜石剥片1
21	第5図	不整形	80	(70)	20	東側は用地外、小竪穴36と重複、土器破片8(第7図19~21)、黒曜石剥片1
22	第5図	隅丸方形	148	128	58	土器破片27(第8図22~26)、黒曜石剥片4
23	第5図	楕円形	106	90	29	土器破片1(第8図27)、剥片1
24	第5図	楕円形	140	98	47	北から西壁は袋状、土器破片3(第8図28・29)、黒曜石剥片1
25	第5図	円形	75	70	20	
26	第5図	楕円形?	81	(44)	26	東側は用地外、土器破片2、黒曜石剥片1
27	第5図	不整形	90	68	26	土器破片29(第8図30~32)、横刃形石器1、黒曜石剥片1
28	第5図	楕円形	128	74	11	底面に礫、土器破片5、小竪穴41と遺構外に同個体破片有り、黒曜石剥片1
29	第5図	楕円形	52	30	6	北東壁際に礫、土器破片3、黒曜石剥片1
30	第5図	楕円形?	78	(46)	25	小竪穴40と重複、土器破片1(第8図33)、剥片1
31	第5図	不整形	180	150	21	小竪穴42・43と重複、2基の小竪穴の重複か?、土器破片12(第8図34~36)、不明石器1、黒曜石剥片3
32	第6図	楕円形	110	94	34	小竪穴33と重複か?、底面に小ピット、土器破片15(第8図37・38)、黒曜石剥片7
33	第6図	楕円形	200	172	32	上面に礫、土器破片27(第8図39~41)、黒曜石剥片5
34	第5図	楕円形	161	103	27	南西壁際に小礫、土器破片15(第8図42・43)、黒曜石不定形石器1、打製石斧1
35	第5図	楕円形?	128	91	17	土器破片5(第8図44)、黒曜石剥片2
36	第5図	円形	66	63	37	小竪穴21と重複、土器破片3(第8図45)、横刃形石器1、黒曜石剥片1
37	第6図	円形	66	63	37	上面に小礫、南・北壁は袋状、土器破片23(第8図46~48)、遺構外に48と同個体破片有り、黒曜石剥片3、剥片1
38	第5図	楕円形?	(76)	(62)	23	北側を欠損、小竪穴20と重複
39	第6図	円形	70	58	16	
40	第5図	円形	80	66	37	小竪穴30と重複、土器破片7(第8図49)、剥片1
41	第5図	長楕円形	115	72	17	土器破片4(第8図50)、小竪穴28と遺構外に同個体破片有り、
42	第5図	円形	106	100	31	小竪穴31と重複、土器破片9(第8図51)、剥片1
43	第5図	円形	66	58	6	小竪穴31と重複
44	第6図	楕円形?	84	(68)	18	東側を欠損



第7图 第19·25号竖穴住居址、小竖穴20·21出土土器拓影(1:3)



第8图 小竖穴22~24·26·27·30~37·40~42出土土器拓影(1:3)



### 3 ロームマウンド

#### ロームマウンドNo.2 (第3図)

図示しなかったがロームマウンドNo.2は、310×275cmの楕円形で壁はだらだらと立ち上がりスリ鉢状で良くない。深さは深い所で78cmである。

平面を二分割し半分の精査を進めたが、前記したように壁面は凸凹で人為的に掘り込んだ遺構とは考えられないため調査は打ち切った。

土器と石器が出土したが流入と思われる。土器は破片53点、石器は石鏃1点、黒曜石剥片3点である。

### 4 遺構外出土遺物

遺構に伴わない遺物は土器・石器・土製品があるが図示していない。

土器は、中期初頭から後期中葉までの多型式におよぶが、破片ばかり3,874点である。その数は調査面積からみると多く、同個体と思われる破片もみられたが復原できるものはない。

石器は、石鏃2点、打製石斧9点、横刃形石器7点、凹石・磨石類14、原石2点、黒曜石剥片172点、チャート剥片4点、剥片57点である。

土製品は、焼成された粘土塊2点であるが性格は不明である。

## VII まとめ

出土した土器は縄文時代中期初頭から後期中葉の幅広い時期におよぶが、遺構に伴わない破片の方が多い。

本調査は道路改良という限られた範囲の調査であったが、南斜面で竪穴住居址2軒、尾根上の平坦面で小竪穴25を検出している。したがって集落址の一部を調査したことになるが、遺構に伴わない数多い土器破片が注目されることになる。

竪穴住居址2軒は縄文時代中期後半期に帰属するが、該期以外の土器破片が多くみられた。いまだ報告書を刊行できないでいるが、東側隣接地で実施した第4次調査の出土資料も同様である。この事実が調査地点の性格の一端を物語っているように思う。

遺構に伴わない資料が多いうえに復原可能な土器が無いことから、破損したことで不要になった土器や石器を廃棄した「場」と考えてみた。

本遺跡は6次におよび発掘調査を実施しているが、遺跡全体からみたら極わずかな範囲

であり、集落の形態をはじめ時期別の居住区域は一切分らない状態である。したがって、本調査および第4次調査で出土した土器を廃棄した人たちの居住区域はあきらかにできないことになり問題点を多く残している。

第4・6次調査地点付近は遺跡の中では尾根幅が狭くくびれている。この立地の違いが不要となった土器と石器を廃棄する場に選定した要因と考えてみたが、現場作業に携わっていないからいえる事かもしれない。

検出した2軒の竪穴住居址は、昭和42年度に実施した中央道建設地域内埋蔵文化財緊急分布調査で確認した竪穴住居址の可能性が高いものである。現場作業でその2軒を意識した結果ではないが、長年の宿題の一つができたように思っている。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった皆さまに厚く御礼申し上げます次第である。

#### 参考文献

- 1924 鳥居龍蔵『諏訪史 第一巻』《信濃教育会諏訪部会》
- 1956 信濃史料刊行会『信濃史料 第一巻上』
- 1965 藤森栄一編『井戸尻 長野県富士見町における中期縄文時代遺跡の研究』《中央公論美術出版》
- 1968 長野県教育委員会『昭和42年度 中央道建設地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』
- 1980 長野県教育委員会『昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書』
- 1985 原村役場『原村誌 上巻』

写真1  
第19号竪穴住居址  
(南から)

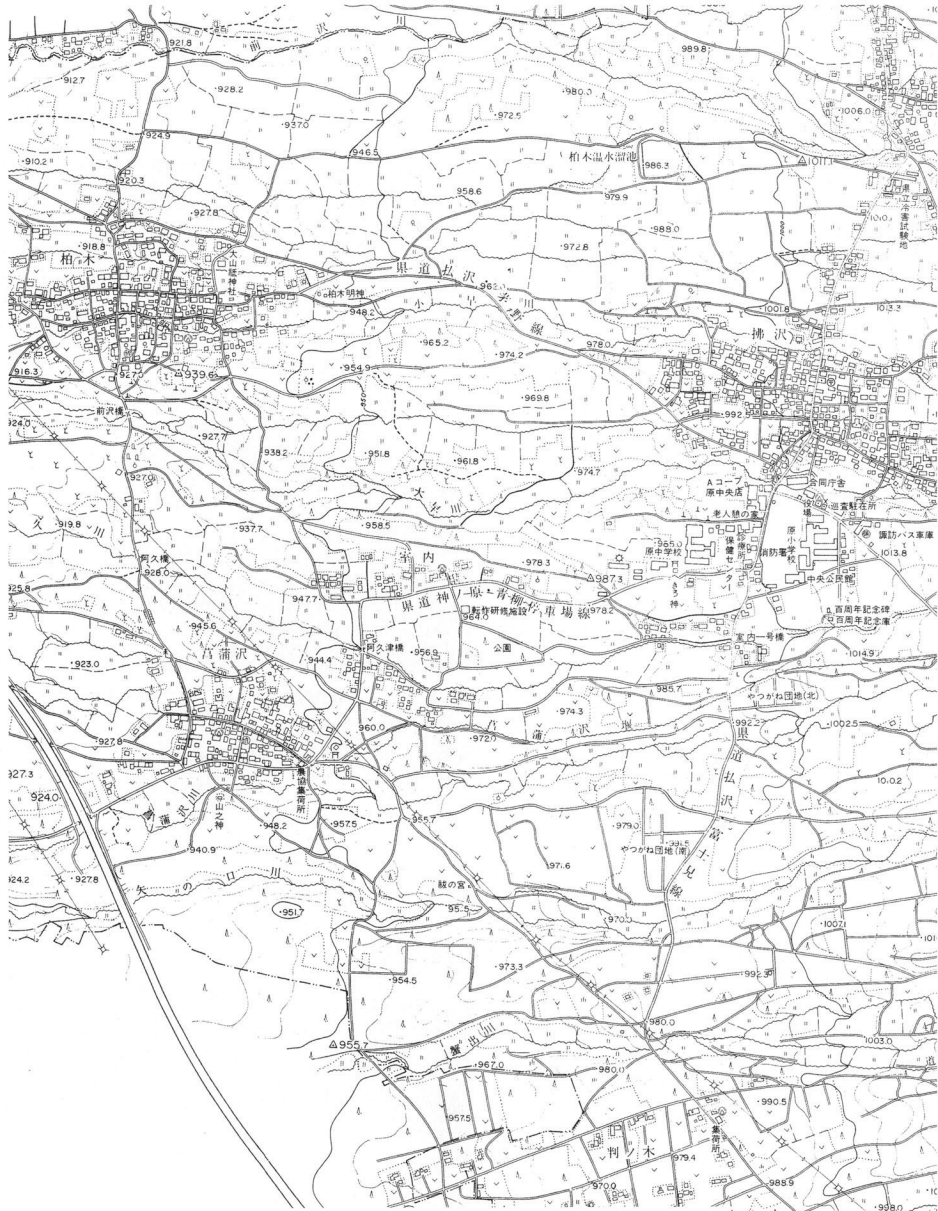


写真2  
小竪穴群  
(東から)



写真3  
小竪穴41  
土器破片出土状態  
(西から)





原村の埋蔵文化財27

**徳久利遺跡 (第6次発掘調査)**

富士見町道改良工事に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 平成6年3月

発行 原村教育委員会  
長野県諏訪郡原村

印刷所 日本ハイコム株式会社